

た感慨無量なものがある。

## 樺太引揚げの労苦

北海道 鈴木 清

大正十年父母と共に樺太に移住、昭和二十年まで王子製紙会社の山林の仕事に従事しました。昭和十一年召集され北支に三年間兵役、昭和十五年部隊交代で除隊、樺太に帰還再度王子製紙工場に働きました。

父友治（日露戦争に従軍）は日露戦争で樺太を得たのに子供の代で取られたと狂気な怒り、くやしがりました（当時友治は七十一歳）。竹槍で敵を倒すとあばれる始末でした。

引揚命令の出たのは二年後、其の間食糧はなく、大豆やコウリヤンの配給で、年寄、子供計八人で食べることに一番苦勞をしました。

昭和二十一年に私共の住む樞保部落にロシア人二十五家族がはいって来ました。大きな家には強制的に一家族

づつはいり、私の家にも一家族はいりました。ロシアの人達はまずしい家族ばかりで、日本人の持ち物をほしがり、恐ろしいこともありました。玄関に機関銃を据えて兵隊が家中を探すなど無法状態でした。

どこの国も同じで、このように悪い人も居れば好い人も居りました。子供等がいじめられて泣いておれば、やさしく助けてくれたり、私等が食べ物に不自由しているのをみて親にかくして色々な食物を持って来てくれたり、人情に国境のないことを知りました。

子供達も仲良くなり、日本に行ったら食べる物がなくて死んでしまうから行くのはやめると親切に言ってくれました。今でも其の子供達のことを思い出しております。

幸い父がロシア語を話せたのでいろいろのこともあったが、昭和二十二年四月十八日やっと命令が出て雪道を急がされ、来て見れば汽車はこないし、寒さに震えながら待っていると、夜七時頃有蓋貨物車が来ました。真暗の貨車に乗り、年寄に子供達は緊張がほぐれ小便で車内びしょびしょになりました。

朝五時真岡に着き、十一時まで外で待たされ十二時近くに収容所へはいりました。そのとき乗船のため収容所を出る人と入るわれわれ大変な苦勞をしました。引揚時の荷物は一人六キロでしたが、あまりの苦勞に命が大事と皆投げました。ところがロシアの人がトラックに山のように積んで運び去りました。情けないやらくやしいやら涙も出ませんでした。引揚船は十五日間も入港せず収容所で待機しました。

その間男達は皆ニシン場に連れて行かれ働かされました。やっと引揚船北進丸入港、五月三日函館に上陸しました。苦勞して持って来た金は使用出来ず一家五百円支給された。その金で親戚のいる芦別町（函館から四百キロ）の営林署で働き（冬期間は休職）六十八歳まで働きました。退職後は学校の小使などして暮らしました。子供達も成長各々家庭を持つことが出来ました。

今までお世話下さった皆様に厚くお礼申し上げます。有難うございました。

## 燃える恵須取

北海道 大木 義人

私は、昭和十五年徴兵検査を受け、直ちに兵役免除（下肢障害）となり引き続き在学中に国家総動員法に基づく大学、高専等に対する徴兵猶予の廃止、学年短縮令等々の実施により私も六か月卒業期間を短縮され、昭和十七年九月卒業とともに、既に就職が決定していた出版会社に就職、学友は陸海軍に入隊し短期間で初級将校として第一線に投入されて行った。

言論出版等に対する検閲等も一段と厳しくなり、物資の統制により印刷用紙の入手もいよいよ困難となった。加えて企業整備令により私の勤める小出版社は、ついに昭和十九年春大出版社に吸収閉業やむなく私は、宗谷海峡を渡りの母のいる恵須取での生活を余儀なくされた。

昭和二十年八月八日私は、西棚丹三井炭鉱職員寮でソ連参戦をラジオニュースで聞き、恵須取行のトラックに